

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特准技術承認雑誌第六十七号
明治三十一年十月七日第三種郵便物認可(毎月二回二日発行)
平成十七年一月一日発行二第百八巻第一号

ホトトギス

一月号



旬日記 汀子

平成十六年一月三日 朝日俳壇 新春詠

少し世に紛れ喪中の年迎ふ
初旅の乗りもつぎ切符懐に
まことの世にも似て非なり絵双六

一月三日 芦屋ホトトギス会
乗初となりし送迎係かな
東雲の浮び出でたる初明り

三日はや集ふ心のありしこと
一月四日 関西野分会
太陽に命ゆだねし雪達磨

若菜摘む野に放ちたる志
もう誰もそれとは見えぬ雪達磨
一月四日 下萌句会

歩いて五分の距離や乗初す
一枚のちの消息のなき嫁が君
まだ抜けぬ正月気分ある書齋

百年の家に居つきぬ嫁が君
一月五日 ロイヤル俳壇
雪深き地の消息として聞けば

確かむる講義原稿読始
子雲去りて飾残されをりにけり
雪雲の六甲山を背負ふ街

漱石に身近な話読始
一月八日 清交社
葉を落しきれぬ臘梅香をこぼす

待春の花束を抱き誕生日
寒月に従ふ星のありにけり
寒きこと忘れてしまふ会場に

臘梅に存在の香となりけり
待春の心もこめし花束に
松風の渡る高さに初鴉

バスデーキーキに春を近づけて
風花を逃れホテルに着いてをり
寒月や仕事の枷の消えぬまま

一月九日 工業倶楽部
走り出す仕事すなはち恵方かな
書初の色紙選んでをりにけり

齊粥祝ひて独りなりしかな
去年今年祈りの中にある時間
冬薔薇のなほ色褪せぬ五十本

一月十日 年尾先生を偲ぶ会
枯色の山越えて海春隣
冬ぬくし滝まで行つてしまひけり

富士はもう見えぬ山越え春隣
一月十一日 偲ぶ会
虎落笛いつか消えぬし旅枕

寒雨雲朝日を零しはじめけり
一月十三日 大阪倶楽部
荷を軽く初旅に発つ朝かな

供華に剪り尽せし庭の冬ざる
水仙の香に風筋のありにけり
浜どんど波の先又来るところ

一月十三日 綿葉倶楽部
水仙を活けて客間となりしかな
歸りにには風花の雲去つてみし

水仙の香に筆止めて筆進め
一月二十一日 夏潮句会
大寒の朝の家路となりけり

雨上りさうよ焚火に顔揃ふ
一月二十二日 きさらぎ会
風強き日の着陸に悴みぬ

悴みて聞く消息を諾へる
スケジュール通りにいかず悴める
紅少し濃く引くことに春隣

一月二十三日 時雨句会
霜焼の跡に寄宿の懐古あり
訓辞述べ成人式となりけり

雪卸して旅立ちて来しといふ
霜焼といふ郷愁のありにけり
霜焼といふ診断を下されし

一月二十四日 野分会
降りつづく中で生きく雪だるま
薺とて摘めば名草でありしかな

少し痩せぬしが朝の雪だるま
濡れてなほ存在ありし雪だるま
一月二十七日 有恒倶楽部

すぐ止みて雪青空と入れ替る
寒月の記憶限なく照らしけり
春を待つ恪勤の日々楽しみて

一週間日延べなりしも初句会
雪止みて家居の時間止りけり
寒月に抱く夜空の深さかな

一月二十七日 無名会
初空であり旅空でありにけり
富士隠す雲とても初空のもの

寒灯を消して仕事の山残す
東京の寒灯消して家路かな
初茜よりひんがしの明けて来し

誤字見つけ又読み返す寒灯
遅れ来し人に点さん寒灯

富士山

稲畑汀子

山中湖畔の老柳山荘での春菜会の合同稽古会から一月余りの時間が経った八月の週末に、再び東京の時雨会と芦屋の我が家での夏潮句会との合同稽古会を計画していた。この前の大雨の新幹線の齟齬のことが何度も頭に甦って来ては消えたが、幸い当日は何とか三島駅に全員無事に合流することが出来た。

八月の富士山は一月のうち二十八日は見えないと言われていてとバスガイドが告げた。夏はすつきり雲が晴れることは少ないそうである。

「富士山が見えるといいわねえ」

見えない富士山の方向に目を置いて誰かが眩く。誰もが思っていることであつた。

一月前に訪ねた老柳山荘とは少し風情が変つていた。立秋を過ぎた新涼の風が心地よい。今年の夏は記録的な猛暑であつたが、さすがに富士山の岳麓には初秋の気配が感じられる。庭一面に岩葦や破れ傘の咲き残つた花の中に秋草が散見された。

老柳山荘は四十人近いメンバーが納まると、さすがに大入り満員である。

喜々として一句会済ませた後、一行はバスで宿舎に向つた。宿舎は前の時と同じホテルマウント富士である。山開きの前夜に見

たあの夜の登山道の山小屋の明かりはもう無いだろうと思ひながら皆を誘つてホテルの庭に出た。昼間見えなかつた富士山であるが、今は雲を脱いでほつきり黒い稜線を夜空に浮かべている。

「富士山は夜になると雲を脱ぐのね」

呈念さんと憲治さんがしきりにカメラのシャッターを押している。

「夜写真を撮つても真つ黒に写るのと違う?」

誰かが言っている。

この調子だと、朝の赤富士も見ることが出来るかも知れなかつた。

夜明け前からホテルの庭に人声があつた。窓を覗くとすっきり霧が立ち込めて、富士山の方向は文字通り五里霧中である。

「赤富士は見えないようよ」

同室の姉に声を掛けた。

「あら、残念ねえ。この前は見えたのでしょ?」

「でも、この霧が退けば見えるかもよ」

「句帳を持って、庭に出ない?」

「そうしましょう」

私は早々と朝風呂を部屋で済ませていたので姉とすぐ外に出ることが出来た。

殆どの仲間たちが庭に出て吟行している。ふと気がつくとき何時間か霧が晴れて変幻極まりない雲の間から富士山の赤い山肌

が見えている。

「あれ富士山じゃない？」

「赤富士ですわねえ」

部屋へ戻る人。あわてて部屋から出てくる人。写真を撮る人。頻りに句帳に書いている人。しかしそれはほんのしばらくの間で富士山は再び雲に隠されてしまった。その後は仕方なく庭先から山中湖を覗き込む人。ただ歩いている人。それぞれが朝食を待つ時間を使っていた。

大きな封筒の速達で写真がどっさり送られて来た。差出人を見なくてもそれが内藤呈念さんからであることが分かった。

急いで開けると夜空にくっきりと稜線を浮かべた富士山が目に見え込んで来た。

「わー！」

それは見事な夜の富士山の麗容であった。写真は引き伸ばされて丁寧に額装されている。他に朝の赤富士の写真も数点あった。シャッターチャンスの見事さ、庭にいた人達の写真、どれもさすがプロという他はない素晴らしい写真であった。

私は書齋に掛けてあった自分の写真を仕舞って、夜の富士山をそこに掛けた。

「お忙しいでしょうから、どうぞお礼状はお書き頂かないように……」

呈念さんらしい配慮の行き届いた手紙を何度も読み返しなが

富士山麓老柳山荘への旅を懐かしく思い返していた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年一月八日 土筆会

東雲に点となりゆく初鵞
消息の途絶えて久し去年今年
固さとは冬芽育むものとして
棒も又折れゆくものや去年今年
一月十、十一日 年尾徳ぶ会

凍つることなき一爆でありにけり
一爆の音より日脚伸びゆけり
明け切らぬどんどの空でありにけり
一月十一、十二日 年寿会

アメリカの船載せて来し冬の瀟
雪のやうなジャケット映ゆるくに彦氏
冬帽を飛ばされまいと佳人行く
遠巻きに海鼠と判るほどの距離
海光の春光となりゆく静寂
裏庭といふ臘梅の落着きに
今年又偲び寿ぎ初句会
水仙組朝風呂組に寝坊組

鶯の笛冬日引つぱり上げにけり
一月十三日 「文勢春秋」出句
車窓てふ探梅心ありにけり

爆泉の飛沫冬日にきらめけり
冬霞富士点描のごとく置く
初句会此岸彼岸の繋がりぬ
釣人に冬瀟及ぶ礁かな
七島を隠し切れざる冬霞
冬日 燦 鶯 鳩 鴉 鷗 飛 機

一月十四日 登高会

寒鯉の錦は泥に紛れざる
山襲を鋭角にして日脚伸び
初笑鼻が歪んでをりにけり
寒鯉の口より目覚め初めにけり
日脚伸び君の心が判るほど

一月十五日 蕉心会

蕉像の目には厳寒届かざる
蕉像に寒いと言うてみたもの
三寒に水を湛へて四温晴
春隣 芭蕉 三百六十歳
川を見る君の唇悴めり
蕉像に何か着せたき厳寒に

大川に船音冴ゆる一ところ
飛機雲の一直線に冴ゆるかな
一月二十日 草木瓜会

初富士に心正されゆきにけり
寒鴉銀座灯点り初めにけり
初富士に太陽の従うてをり
初富士に日本の生活始まり
寒鴉黒は此岸の色であり
一月二十三日 時雨会

成人の日の若者よなぜ猛る
耳といふ霜焼に好まれしもの
雪卸生活となりし転居かな
絶世の美女霜焼を託ちけり
雪卸だけが動いてゐる都心
成人の日より 禁煙せし女
一月二十七日 若水会

黒鍵に白魚躍り初めにけり
白魚に齒の驚いてをりにけり
白魚に大河は力抜いてをり
夜咄といふ侘助の晴舞台
一月二十八日 目黒字園句会
春隣怒瀟に色を置き初めし
水仙の風を拒んでをりにけり

雑詠

汀子選

春暁を覚めず逝きたる弟よ
福岡 松尾緑富

物言はず春曙の訣れとは
同

弟の亡き部屋空し冴返る
同

霧流れ全てのものを遥かにす
榎原 稲岡 長

稿終へて何日ぶりの虫の声
同

夜伽する人にしみじみ秋灯
同

富士の着る雲の変幻露涼し
京都 安原 葉

雲の間に赤富士覗きはじめけり
同

青春の日の甦る莊涼し
同

富士蔵す闇の時つ露けさよ
神戸 山田弘子

稲光一夜の旅を濃きものに
同

稲光闇の中より闇の富士
同

佐比売野の起伏に雪加沈み啼く
浜田 田中静龍

夏草に句碑の伽石しづみぬし
同

夕菅や佐比売野の風荒しとも
同

馬鈴薯の花紫に味を秘め
東京 稲畑廣太郎

断崖に丸き地球を見て涼し
同

夏館虚子の座りし椅子はこれ
同

女郎花をみなととしての丈を超す
京都 粟津松彩子

露草の瑠璃よりも濃き瑠璃はなし
同

松虫の闇にさまよひ弱法師
同

思ひ立ち靈地熊野の大滝を
龍野 浅井青陽子

中辺路の溪谷にして朴の花
同

中辺路の溪の底よりほととぎす
同

踊笠かぶれば浮かれ心あり
鎌倉 荻江寿友

大文字消えたる山の闇の濃し
同

流燈の小さき点となりて消ゆ
同

あめんぼう上目遣ひでありにけり
東京 坊城俊樹

あめんぼうの影鬱々としてをりぬ
同

あめんぼうの影鬱々としてをりぬ
同

星の奥またその奥の星流れ
同 今井千鶴子

七つ星囲みて星の流れけり
同

朝食やアメリカ人は林檎好き
同

虚子の星年尾の星とまつりけり
札幌 高橋笛美

全集の一冊欠けてぬし曝書
同

ものごころつきし頃よりある夏樹
同

昨夜降りし星の屑かも金鳳華
前橋 岸 善志

底紅の蜜白なるか紅なるか
同

あはれ花つけてままこのしりぬぐひ
同

風の盆なりし小指の先までも
神戸 後藤比奈夫

人恋の角度に結ひし踊笠
同

風通しよげに八尾の踊笠
同

雑詠句評（十二月号より）

純也・雅　・基子

一步・昭代・仁義

比奈夫・小木菟・暮潮

弘子・汀子

冷やかなわれと思ひし別れかな　西宮　山田桂梧

人が何か頼みごとをして来たのだが、それに応じることなく、その人とはそれつきりになってしまった。それを客観的に見て、「何と冷やかな自分であることよ」と振り返っているのである。「別れかな」に何か背景があるのだろう。それを知らないと分りにくい一句でもあるが、しかし、読者が勝手に想像すればいいことなのかもしれない。（純也）

自らを顧みている心情の深い句に思える。冷やかという季題の解説には「秋になってなんとなく感ずる冷気をいう。石の上や板

の町あるいは公園のベンチに腰をおろしたりしたときなどに、ふと感ずるのである。」（ホトトギス新歳時記参照）とある。別れという下五字に作者の具体的な事実が隠されている。冷やかという季題に代弁させた作者の別れ。（汀子）

母のこと偲べば星の流れけり　神戸　藤井啓子

亡くなられた人は星になるとは小さい頃によく聞かされた。お母様を偲んで夜空を見上げたとき、通じたかのように流れ星が尾を曳いて過った。昼間は忙しくして、心さえなかなか自由になれないが、夜になって、やっと自分自身の時間を持てたときに、静かに偲んでいらつしやる姿。言葉では抑えた感情が溢れそうな御句。

明日からの暮しも亦見守って下さいというお願いの祈りは、その流れ星の消える瞬間までに間に合ったでしょうか。（雅）

母上を亡くされてまだ日の浅い作者。星が流れる時に願い事をするのではなく、母上のことを偲んでいた時に星が流れたのである。自ずと願い事は成就されたように母上との懐かしい思い出に浸り母上との一体感にある作者なのである。（汀子）（以下略）

若水集

廣太郎選

台風・夜なべ

ながら癖今に引き摺りゐる夜なべ
 一点が字となるルーペ夜なべの灯
 虫の這ふやうに字が見え夜なべ描く
 台風の逸れて予定のなき午後
 吾も又夜なべの母となつてをり
 耳と口会話にあづけ夜なべの手
 台風が庭に来てゐる騒ぎかな
 血の騒ぐてふは台風来るときも
 良き酒に一夜台風やり過す
 台風にわが家狙はれをりにけり
 台風に家揺れてをりきしみをり
 台風に耐へたる幹をさすりけり
 恋故に捲る夜なべ人知らず
 失ひし恋を秘めたる夜なべかな
 夜なべ置きふつと終りし恋のこと
 また次の台風と言ふ空模様
 町沈む台風余波の高潮に
 台風禍残す果樹園なりしかな

直方 林加寸美

同

柏

田丸千種

同

西尾 村松五灰子

同

神戸 藤井啓子

同

我孫子 副島いみ子

同

同

同

同

同

同

同

同

台風の目の中にある進路かな
 茨木堀 恭子
 台風の一つ目入道睥睨す
 同
 ドアノックして台風の去りゆけり
 同
 台風の空を剥がして行きにけり
 立川 日置正樹
 台風に夢ごと揺るゝ一夜かな
 同
 夫の寝ね子の寝ね夜なべとはなりぬ
 同
 夜なべの灯のれん仕舞ひし店の奥
 東京 橋本くに彦
 妻と夫音を違へて夜なべかな
 同
 釋解くささくれの指夜なべ終ふ
 同
 台風や竜馬の像の仁王立ち
 狭山 大久保白村
 同
 台風のさなかに響く時報かな
 同
 台風の去り島の位置ずれにけり
 同
 なまぬるき台風圏を鴉翔ぶ
 函館 館石哲を
 同
 台風過北大ポプラ薙ぎ倒し
 同
 牛遊ぶ台風一過のトラピスト
 同
 台風の湿り三和土にひろされる
 岡崎 小森葵城
 同
 台風の風無き静寂園の朝
 同
 台風を支へ木太き長屋門
 同
 台風の余波の被害に怯えつゝ
 龍野 浅井青陽子
 異常なる季節の上にもまた台風
 同
 老社友語る夜なべに聴き入りし
 同
 台風の外れし安堵と云ふ疲れ
 石川 定梶き悦
 漁火も疲れの見えてぬし夜なべ
 同
 おしやべりも快調をみな集り夜なべ
 同

若水集句評 廣太郎

一点が字となるルーペ夜なべの灯 直方 林加寸美

小さい字を御覧になっておられるのだろう。筆者も最近はおめつきり小さな字が見え難くなってきたが、特に夜の電灯の下では尚更である。知る人ぞ知る作者も俳句に携わっておられる方であるが「夜なべ」で校正等をなさっておられるのだろう。季題が生きている句である。

台風の逸れて予定のなき午後 柏 田丸千種

天気予報は直撃を予想し、その日は何もスケジュールを入れなかった作者である。ところが予想は外れ台風遍の素晴らし、お天気になってしまったのだろう。「台風」の逸れた安堵感と予定のない手持無沙汰な作者の様子も見て取れ、季題の気紛れな動きが見事に表現されている。

恋故に捗る夜なべ人知れず 我孫子 副島いみ子

愛する人のマフラーやセーマを「夜なべ」をして編んでいるような情景を想像する。素直に「恋」と表現しているところに清潔感がある。禁断の恋、とは少し考え過ぎであろうが誰にも知られる事のない秘密の恋なのだろうか。少しセンチメンタルな女心も感じられる。

台風の一つ目入道睥睨す 茨木 堀 恭子

神が悪魔か、はたまた妖怪変化か、「台風」が意思あるごとく迫ってくる。現代では「台風」が気象現象である事は誰でも知っているが、実際昔はこのような印象を人は持っていたのだろう。まるで生き物のような、特に中七「一つ目入道」とは正に言えて妙である。

夫の寝ね子の寝ね夜なべとはなりぬ 立川 日置正樹

先ず夫が先に休み、子がその次に寝に行く。結局母親が最後に残るのが、一人になりやつと「夜なべ」が始まるのである童謡にもこの情景を歌ったものがあるが、日本の伝統的な家庭の姿が目の前に浮かんでくる。現代ではどうであろうか。筆者には少し羨ましい気持もある。(以下略)